

黒田官兵衛 in 二日市温泉



黒田如水像（福岡市博物館蔵）

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康。三人の天下人に愛され、恐れられた男、官兵衛。その類いまれな知略と先見性で戦国の世を駆け抜けた知将・黒田官兵衛孝高（如水）は、戦乱の世にあって「戦わずして勝つ」を実行した、奇跡の名将。

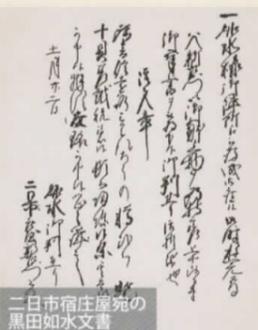
播州の御着城主・小寺家の家老として家督を相続した陪臣に過ぎない官兵衛が、一躍歴史の表舞台に登場したのは、織田信長に拝謁した三十才の頃。確かな知識と情報収集力で、いち早く信長支持を表明し、天下布武の突破口を開いた八面六臂の活躍は、彗星のような輝きを放っています。

本能寺の変で信長が斃（たお）れた後も、秀吉の天下取りを支え導きました。また、戦国の時代において、側室を持たず一人の女性を愛した愛妻家であり、歌や茶会を愛する文化人であり、キリシタン大名であるなど、豊かな人間愛が終始貫かれています。関ヶ原の戦いでの戦功により、徳川家康より筑前国を拝領した息子「長政」と共に福岡藩 52 万石の礎を築き上げました。

二日市温泉は、1300 年の歴史を持つ九州最古の温泉です。この地に大宰府政庁があった頃からにぎわっていたと伝えられています。万葉の歌人・大伴旅人が大宰帥であった 8 世紀中頃『湯の原に鳴く葦田鶴はわがごとく妹に恋ふれや時わかず鳴く』と、妻を亡くした悲しみを湯の原（現・二日市温泉）に鳴く鶴に託して詠んだ歌が有名です。また切り傷・やけどによく効くと言われたため、戦乱の頃、武将たちも戦の傷を癒しました。江戸時代になると黒田藩が二日市を日田街道の宿場に決め、御茶屋（本陣）を置いて「御前湯」を設けました。藩主が入湯したことから、その名がついたようです。明治 22 年に九州鉄道が開通してから温泉ブームに。遠くからも観光客で賑わうようになり、文豪夏目漱石も明治 29 年、新婚旅行で訪れました。古くは「次田（すいた）の湯」、「薬師温泉」、近世は「武蔵温泉」と呼ばれていました。1950 年（昭和 25 年）「二日市温泉」と命名されました。



川湯だった頃の二日市温泉



二日市宿庄屋宛の黒田如水文書



紫藤の瀧



武蔵寺 長者の藤



御自作天満宮



御前湯



御前湯



夏目漱石 歌碑



大伴旅人 歌碑



温泉名物 湯の花羊羹

●官兵衛と二日市温泉

『名将言行録』の中の『黒田孝高(官兵衛)の言行』に「牟左志(武蔵温泉、現在の二日市温泉)に滞留の時」という記載があり官兵衛と二日市温泉との関わりを示しています。また、かつて有岡城に幽閉され翌年救出された後、有馬温泉に湯治に出かけ療養に努めた官兵衛は後々まで温泉を好んでいた様子が伺えます。晩年、福岡城内の居館が完成するまでの間、太宰府天満宮の境内に隠棲した官兵衛。当時から栄えていた二日市温泉まで足を伸ばし湯治に来られたのかもしれませんが。

※『名将言行録』戦国時代の武将から江戸時代中期の大名までの192名の言動を浮き彫りにした人物列伝。幕末の館林藩士・岡谷繁実が15年の歳月をかけて完成させた。

●官兵衛と二日市

二日市八幡宮に伝わる『二日市宿庄屋覚書』には、若い頃の官兵衛と二日市の関わりを示す話が二つ収められています。ひとつは天正 19 年(1591)に当時の筑前領主だった小早川隆景が出した制札で「黒田官兵衛より文書が届いた時には伝馬で送り届けること」という内容のもの。もうひとつの話は官兵衛の陣所へ味噌酎の樽 2 つとアワビ 10 個を贈ったことに対する官兵衛の礼状の写しです。この時の陣所とは朝鮮出兵の前線基地であり建設にあたって官兵衛が縄張りしたという名護屋城と考えられています。

●官兵衛と藤の花

黒田家の家紋のひとつ「藤巴」。この紋の出自に関して伝説的に語られる話があります。信長に離反した荒木村重の説得に向かい逆に捉えられ有岡城に幽閉された官兵衛。洞穴のような劣悪な環境の中で牢から見えた一房の藤の花が心の支えとなったことから、その気持ちを忘れないように家紋にしたという説です。そして毎年 4 月 29 日に開催される「二日市温泉藤まつり」。九州最古の寺「武蔵寺」で、樹齢 1300 年を超える「長者の藤」の供養祭典を中心に行われます。ともに藤の花への思いから生まれた「家紋」と「まつり」です。

●官兵衛と長崎街道

長崎と小倉を冷水峠を超えて最短距離で結ぶ長崎街道。これは、他国の大名が城下の福岡を通ることを避け、戦乱で城下町が荒廃しないよう官兵衛が考案したともいわれています。そして官兵衛の死後、その意を受け初代藩主・長政は黒田節で有名な母里太兵衛に命じ最大の難所である冷水峠を開通させ、筑前六宿と言われる黒崎、木屋瀬、飯塚、内野、山家、原田の 6 つの宿場を設け藩内の長崎街道を整備しました。2012 年、長崎街道筑前六宿が開通して 400 年を迎えました。今なお往事の面影が垣間見えます。

※内容やエピソードなどは資料により諸説あります。ご了承ください。

●官兵衛と道真公

二日市は菅原道真公ゆかりの地。無実を天に訴えたという「天拝山」。身を清めたとされる「紫藤の瀧」。道真公が武蔵寺参詣の折、自ら像を刻んだ木像を祭る「御自作天満宮」や数々の伝説など今も息づいています。そして和歌、連歌、茶の湯を楽しむ文化人でもあった官兵衛は「和歌・連歌の神」としても知られる道真公を敬愛していました。生涯を戦いに明け暮れた官兵衛。太宰府天満宮に隠棲していた晩年のひときは、憧れの道真公の傍らで穏やかに風雅に興ずることが出来た時間でもあったようです。



温泉大好き ふるた官兵衛くん